

ブラウニングの「チャイルド、ローランド・暗黒の塔に到達せり」は果して寓話詩であろうか。(その二)

渡 邊 清 子

はじめに

前回の紀要⁽¹⁾においては、上記表題の詩の成立の過程と、詩の内容そのものの解釈に重点をおいて述べたのでもし参照いただければ幸である。今回は此の作品に対する多数の研究者たちの意見や批評を紹介しつつ、問題点に答を出してみたいと思う。

先ず最初に、日頃よりブラウニングを尊敬し、彼の詩を愛読し、研究していた J. T. Nettleship の論文にスポットをあててみよう。彼は *Childe Roland* に関して24頁にわたる長いエッセイを書いている。しかし彼は当時の思想的な風潮の高いうねりの頂点に立つ詩人として Browning の宗教性と道徳性を強調しすぎる嫌いがあると言われ、かなり酷い批評をうけている。たしかに彼は此の作品に教訓的な色づけをしすぎたため、読んでいるうちに強制されているような煩わしさを感じさせられる時がある。しかし深い宗教的洞察力をもって、精密に作品を研究しているので部分的ではあるが参考に供したい。

Nettleship は冒頭に George Eliot の “The words of genius bear a wider meaning than the thought which prompted them.”⁽²⁾ という言葉を掲げて

(1) 信州豊南女子短期大学紀要第9号

(2)と(3) J. T. Nettleship; *Robert Browning Essays and Thoughts* (Charles Scriber's Sons, New York, 1895) p.89.

いる。誠に含蓄のある彼女のこの言葉によって彼は大いに励まされたに違いない。Nettleship が自ら言っているように、彼は長い間、注意深く研究を重ねて、Childe Rolandを通して詩人がいかなることを世の人々に伝えようと考えていたのか、その内容を知りたいと努力して来た。しかし Browning 自身がこの詩には全く allegorical な或いは moral な意味を含めて書いていないと、否定しているからには全くとりつく島がなく、努力は徒労に帰してしまったかに思えた。ところが、“…, the passage above quoted seemed to sound in my ears like a possible help to interpretation.”⁽³⁾と彼が告白しているように、Eliot によって視野が開け、勇気づけられた。そして彼は天才的な詩人が駆使用する無数の豊かな言葉は、詩人自体の思いを乗り越え、彼自身が気付いていないかも知れない思想を披瀝している可能性もあり得ることを察知することが出来たのである。更にそれを確信せざるを得なくなった理由を、今取り上げている Childe Roland (という romance) に当てはめて彼は次の如く論じて行く。

… the present romance is so full of suggestiveness and possibility of second meaning that I should not feel justified in passing it by in silence or with no more than a slight comment.

つまり Nettleship によればこの詩にはあまりにも、暗示的な示唆に富む要素が多く、言葉の裏にかくされている別な、第二の意味がある可能性が強いと言うのである。それ故、それを見逃し、等閑に付すのは妥当ではないと考えた。そのため詩人が意図的に詩の中にある思想を内蔵させたか、否とにかかわらず Nettleship はひたすら、この詩に含められている真の意味の探究にかゝったのである。

前号では各節の解説の外に全詩の概要⁽⁴⁾をのべて置いたが、Nettleship が此の長詩の中のどの点に重きを置いて読んだか調べておく必要があるのでみておこう。

(4) 前号 page 6 参照。

長い1日が降りかけた日暮れ時、歩き疲れた1人の若い騎士がふと足を止めると、その公道から日の没する方に向う細い見知らぬ道にさしかかっていることに気がついた。彼は不思議な訳ありそうな暗黒の塔（the Dark Tower）を発見するために組織立てられた騎士団の中の生き残りの最後の1人であった。彼の同僚は皆死に絶え、多くのものは節操なき不逞の者になり下がってしまった。彼は重い暗い気持になって、佇みながら、日の没する道に進むべきかどうかと思悩む。その時彼は前方にいる1人の年老いた白髪の、気味の悪い、跛の老人に気がついた。そして暗黒の塔への道をたずねた。老人は無言のまま、意志の悪い目付きで西方を指し示した。その奇怪な老人は彼のいうことを騎士が信じないでいることを察して、内心の喜びをかくし切れぬ様子であった。しかし騎士は今更暗黒の塔を捜すあてがないので、老人の示す小道に入って行く。たゞ同僚の騎士達が失敗して、亡び去ったその轍の跡を踏まないで、今までの苦しい長い探究の旅を早く終え、世を去りたいと願うばかりであった。

ところが彼が小道に入るとすぐ、疑いの目をもって後を振りむいて見た時、かの老人の姿も、広い公道の姿もかき消えてしまっていた。前方にはたゞ地平線の彼方まで続く荒涼とした灰色の原野と夕暮とがあるのみだった。それで彼に出来ることは前進のみであった。（Childe Roland 前号IX節参照）

原野は草木の殆どない不毛の荒地で、大自然の中にあるものは、窮乏と遲鈍と嫌悪だけであった。騎士が荒野に入って以来、自分以外に見た生物は、やせ衰えて、まるで知覚を失って、硬直したように沼地に立っている盲目の1頭の馬であった。彼にはどうしてこのような馬がこゝにいるのか皆目見当が着かなかった。（X～XIII節参照）彼は荒野で目撃した身の毛がよだつような数多の光景に恐怖でおのきなながら、我に帰り、過去の同僚たちのことを回想してみたが、やはり彼らの信義なき不誠実さが思い出されるばかりであった。彼は重い足を引きずりながら前進していると突然小さな黒ずんだ川が激しく泡立ち流れているのに出合った。（XIXとXX節参照）病的なまでに恐怖に襲われ続けて来た彼ではあったが、どうしても歩いて川を渡らねばならなかった。彼は1

足進む度に、川底にいるかも知れない死人の顔を踏みつけはしないかとおののき、川底にある窪みを槍先でたしかめている時、刺した水鼠の音が赤児の悲鳴のように聞えたりして彼を脅かした。それでも彼は辛うじて向う岸に辿りついた。

ほっとする間もなく、彼は何者かによってその地が野蛮な戦の巷と化し、残酷な死闘と殺戮が繰り返されたであろう場所に立った。しかしこの地に踏み込んだ足跡も、出て行った足跡も残っていなかった。(XXII～XXIII節)。そればかりでなく、更に前進した時、想像しただけでも、彼の身の毛を逆立たせ、絶句させるような恐ろしい、人体を責めさいなむ刑具が、人目に着かぬまゝ放置されてあるをみた。(XXIV節) 何故に？と彼はおののく。

それから彼の旅はかつては森であったと思われる所へと続く。その森は荒れ果て、全く精気がなく、何の役にも立たないむき出しの土地になってしまっていた。あるのはただ汚れた沼や粘土や瓦礫や砂、それに赤くただれて黒ずんだ腫物のような苔が生えているというような無残な姿であった。騎士には最早希望らしいものは見えなかった。行けども、行けども道はなく、どこからも援助の手は与えられそうになかった。その時ふと、大きな黒い鳥が羽を拡げて彼の頭上かすめ、帽子を払いのけて行った。とっさに彼はそれは案内人かも知れないと思った。

しかし落ちついて良くみると、今まで薄暗がりの中にあつた荒野の姿はなく、粗雑な高い山々が周囲を取り囲んでいた。文字通り袋の鼠同然になったと気付いた騎士は脱出を試みたが無駄であった。彼は自分の上に何か悪い企みが秘かに振りかゝっているのを感じ、悪夢にとりつかれているおもいがした。自分がこれからどうなるかは神様のみが御存じだ。畏にかゝってしまつては、これ以上進むのは無理だとあきらめた。すると突然熱い刺すようなものが躰にあてられたように、ある考えが頭に閃めいた。前方に見える2つの岡、その真中にあるのが、自分が長い年月の間、苦難に耐えて探し求めていた塔そのものである、と知らされたのであった。(XXX～XXXI節)

沈みかけた太陽の残光がパッと塔の裂け目を通して赤く輝き、今まで聞こえ

ていなかったと思っていたベルが一層高らかに鳴りひびき始めた。騎士の耳には自分と同じように、quest（探究）の旅に出かけた同僚の騎士達の氏名や彼等の生前のすぎし昔のことどもを鐘の音が伝えているのがよくわかった。死せる同僚たちは今、旅を終えて暗黒の塔に辿り着いた最後の1人である Childe Roland がどんな様子でやって来るかをみようと集って来て、輪になり、上の方から彼を見まもっていた。Childe Roland は勇気を奮い起して口にらっぱを当て、“*Childe Roland to the Dark Tower came*” と高らかに告げた。

あくまでもこの詩を“*Fantasia*”（幻想詩又は想像詩）或は“*work of fancy based on picturesque impressions*”と考えることをよしとしない Nettleship は次の如く、自己の主張をはっきりのべて論を展開していく。“Such is the story told by this terrible poem, every word of which seems to speak of one of those deep hid unspoken tragedies which convulse the intellectual and moral life of man here and there.”⁽⁵⁾ 彼はこの詩を1人の人の一生の旅路をあらわす allegory（寓意物語）と考えざるを得なかったらしく、Wm. Clyde DeVane が“*For some of the elaborate allegories worked out of Childe Roland see the essay upon the poem in T. J. Nettleship’s Essays and Thoughts*”⁽⁶⁾ と推奨しているように、実に念入りな紹介の仕方をしている。Nettleship は、詩自体と直接的には全く関係がないかの如く思われる人の一生、つまり幼年時代から少年時代を経て、青年騎士として旅立ちするに至るまでの精神的成長過程が詩の中に盛り込まれていると説く。一見無駄な遠まわりをしているように思われたが注意深く読んでみると、若い青年騎士が重大な quest の旅に出かけた時に遭遇する様々な苦難や戸惑いの原因が良く理解出来るので、決して無駄であったとは思えぬ。それで本論文ではその主なる

(5) J. T. Nettleship; *ibid.*, p. 94.

(6) William Clyde Devane; *A Browning Handbook*, (F. S. Crofts & Co. New York, 1935) p. 206.

部分だけ初めに要約したい。気の早い多くの読者は Browning が詩を書き始めた時点からすぐ内容の吟味を始めて良いと考えるかも知れないがやむを得ぬ。

Nettleship の論文を読むにあたり、我等が留意すべきことは、彼が宣言しているように、彼はキリスト教信者であるということである。従ってそれがこの詩を考える拠点となっていることは言うまでもない。彼によれば人は皆、この世を良くも、悪くも、生きて行けるように、それぞれの特性や特質を授けられている。幼児は輝やく光の中で物を見分け、天より聞こえてくる美しい音色を聞き分けることが出来るようにされている。子等はみな神のみたまの祝福により悪から守られている。少年時代には悪の影響に抵抗出来る強さが与えられているが、青年期になると、所謂「悪魔の働き」に負けて、傷つけられ、損なわれてくる。しかしそれは一時的なことであって、彼は天の助けにより、遅かれ早かれ、天地の不思議に気がつくようになり、物思ふ時が訪れ、ひいては崇敬の念が養われてくる。この崇敬の念を持つようになると、それは悪を拒む盾となり、彼の進む道を照らす光となるであろう。人生の歩みを一歩ずつ進むにつれ、若者の思考や想像力は発達し、霊の視野も広くなり、彼の進路は美しく輝き、希望に満ち溢れてくる。此の頃になると自己意識が芽生え始め、もはや彼は根無し放浪者でなくなる。次に彼に付与されるのは心から湧き出る知識欲である。くめどもつきることを知らぬ知識の探究欲。それはどこからくるのか、それがなぜ与えられ、何のためにそれを用いねばならないのか、自問しながら彼は空を仰ぐ。すると彼は名も知れぬ不思議な霊の如きものが、彼の真上の空高き所で動いているのをみる。彼は畏敬の念に襲われ、“The Spirit of God!”（これこそ神のみたま!）と初めて神を認識することが出来る。その時の青年の感動を Nettleship は次の如く伝えている。“God becomes all in all to him; he knows not how it is, but he feels within him that it is God who gave him these attributes, and not knowing no more he strains in agony for a further knowledge.”⁽⁷⁾ 青年は与えられたたまものをどん

(7) J. T. Nettleship; *ibid.*, p. 99.

な目的のために用いるべきかを考え抜いた末、やはりそれは神のみの秘事としておき、自分は与えられた判断力によって善処し、神からゆだねられた責任を果すしかないと思い定めた。

長ずるに従って、若者は自己に閉じ籠ることをせず、理性的な正しい判断力をもって、世の人々と交わらざるを得なくなった。そして色々な複雑な社会生活を経験しているうちに、人々と異なる自分自身の道を求めて進み、別れ別れになってしまった。遂に成人して大人になったこの男は一人ぼっちになり、他の人々が追い求めて失敗し、挫折したその道を一人で辿ることになった。

そうしているうちに、その男の人生から神に関する観念が薄らぎ、遂に消え去ってしまった。精霊が彼が進む小道にあらわれ寄り添うこともなくなった。彼にはもう昔の栄光に輝いていた若き姿はなかった。折しも神より声があった、「汝の長い人生の旅路を今まで私は導き、正義観と道徳心、理性を付与して来た。それで汝は同僚から尊敬と愛をうけ、友達から幸いの日にも、不幸の日にも、恩恵をうけて来た。しかしもう今から汝は自分のことは自分でせねばならない。」と申し渡された。男は自分がどれ程多くの人々から恩恵を被ったか知れないのに、過ちや欺瞞のみちた生活を送って来た。それ故、すべての救いの手は彼から取り除けられてしまった。今はもう自らの足で立ち、孤独に耐えて行くより外に道がない。慰はどこからも来ない。たゞ嘲笑の聲が反響するばかりである。神はその姿を雲の後ろにかくされてしまった。彼は神の居られない世界を想像しただけでも心細く恐ろしい。今こそ自分の勇気が試される時が来たときとった。Nettleshipはこの男の消息を次のように述べる。

“And now, when all these aids are gone, and he is really left to rely on himself, comes the time when his mettle is tried indeed”.⁽⁸⁾

しかし Nettleship はこの時でさえ神はこの男に救いの手を差しのべたく思い、遠くから彼に愛の眼差しを向けていたとのべている。ともあれ、この若者(実は騎士自身)はこれからはもう何ものに対しても、怯むことなく、例えそ

(8) *ibid.*, p. 102.

れが失敗に終ろうとも、勇気を鼓舞し、挑戦し、前進するよりすべが全くなかった。

かくして決意を新にし、quest (探求) に旅立った Childe Rolandではあったが、やはり道に踏み迷い、跛の白髪の老人に進むべき道を尋ねたのであった。その老人の風采や様子からみて、嘘を教えているらしいと疑って、不安になった。しかし彼は失敗するかも知れないと恐れつつも、指さされた小道に入って行った。Nettleship はこゝで、"… no man Achieves an end without failure first, the more disastrous the better."⁹⁾と私見を述べている。彼によれば Roland は老人の姿を見ただけで理性で判断し、疑ってかかった。こゝで彼は間違いを犯した。つまり彼は天賦の理性を働かせて"unbelief"の罪を犯したと言うのである。彼は騙されたと思っても老人の指示を信じ、案外それは真の道に通じるかも知れない、と考え直して前進したのだったら、不安と絶望にかられ、死んだ方が増しだとは思わなかっただろう。この次点で Roland は quest の purpose (目的) がわからなくなってしまったと Nettleship は次のように説明する。

His failure to use his faith, his failure to see the germ of truth in the lie, is punished at once; his safe road is gone; he stands blank and purposeless in a grey plain of chaotic doubt. His faith gone, his power of buoyancy is gone, and his power of reason too. He is left at the end of his day, with that grey plain all round him, …¹⁰⁾

というわけで、彼は前方はるか彼方に拡がる中世紀的な、古代的な残骸の中を、全くの助けなく、沈み行く真実なる太陽 (sun of truth) の残光を見当てに歩を進めることになった。しかしこのように、残酷な畏にかけられたように見えても、"purpose of God" は必ずある筈。彼は "love" と "beauty" を除い

(9) *ibid.*, p. 104.

(10) *ibid.*, p. 104.

て“judgement, moral sense, reason”のみを携えて、今までの過去のすべてを棄て去り、新しい価値ある一生を自分の責任で切り開かしてもらえることになった。これは愛の神がいとし子を、より良くするための思召しであると Nettleship は強調する。そして更に自個流の論を展開していく。

しかし Roland は love and pleasure を置き去りにして来たので彼の世界は “purposeless and dead” に思われ、希望がなくなってしまった。彼は過去の破滅の中に立って、悲しみと荒廃をもたらした残虐行為や理不尽の跡をまざまざと見せつけられる。しかし彼はなぜそれらの行為が行われたか、の原因に就いては、知らされないまま、隠されている。Roland は彼に授けられている想像力と論理的考察力と同情心を結集して、ひるむことなく、原因の解明のため努力をせねばならない筈である。そこで Nettleship は sin と suffering の traces (跡形) の例として、穴や裂け目をつけられた黒ずんだ羊蹄 (ギンギン) の固い葉 (bruises on the dock-leaves¹¹) を取り挙げ、問題解明の一つの糸口を手繰ろうとする。そして彼はこの羊蹄のもつ重要な意味を説明する。

Roland は踏み荒らされた植物や羊蹄の様子を目のあたりに見て、彼の昔の同僚達が気まぐれに面白半分にした、取るに足りない、たいして害にならないと思ってした多くのいたずらが、どんなひどい悪影響となって残っているかを痛感させられねばならなかった。いかなる些細なことであっても、危害を加えればそれは不正であり罪であり、許されるべきことではない。傷つけられたどんな卑しいものでも、いつかは自分達にとって大切な関係のあるものであることが理解出来る時がくる。丁度 Roland が今荒野の中で体験しているように、と Nettleship は考える。

Nettleship が約百年前に Browning の *Childe Roland* を通して、予言めいた警告を感じ取って次のように述べているのに筆者を驚かされた。“… he

(11) Sir, F. G. Kenyon; (with introduction by), *The Works of Robert Browning: Centenary Edition In Ten Volumes*, (Ams Press, Inc., New York, 1966) Vol. 3, p. 408, st. XII.

(Rolandのこと) is taught that not the meanest thing can be injured now without some terrible result, such as this total desolation round him in some far off future age.”¹²⁾ これはまさに現代世界が問題にしている環境破壊による地球及び人類滅亡に対する警告のさきがけの一つであると考えるのは行きすぎであろうか？ Browning はあくまでもこんな倫理的メッセージをもって書いたのではないと言っているが、やはり大詩人はある意図をもって書いたものではないとしても、我々に考えさせる問題を、Nettleship がいうように提供することがあると思う。

次に Roland が出合った盲目の瘠せ細った一頭の馬のイメージ (st. XIII と XIV を参照) は何を象徴していると Nettleship は言うのであろうか。彼によれば Roland は勿論第一に、人間にこき使われた末、放り出された哀れな馬の姿をみて、飼主の罪の深さを思ったであろう。しかしそれはかつての日には威風堂々たる馬であったかも知れないが、今は嫌悪の念を起こさせる程の醜い姿になったのは、余程罪深い悪馬であったとも疑われた。更にこれは又、大望と熱情に燃えていた昔の騎士自身の失意落膽のなれの果ての罪深い姿の象徴とも思われて来た。彼は自己嫌悪に陥入ったが、これは一面祝福につながる道でもあり得た。つまり彼は再び勇を振り起こし、失意の泥沼から抜け出されているから。

Roland は旅を続けているうちにふと昔の同僚達のことを思い、元気を出そうとした。しかし “Alas, once more he has lost faith; he only remembers their sins, and not all the helpful fellowship, …”¹³⁾ (st. XVI と XVII 参照) とあるように、彼は彼等から罪の意識以外の何もも得られなかった。“Better this present than a past like that; / Back therefore to my darkening path again!” (st. XVIII) 彼はもはや過去のいまわしい死せる者のことはいっさい忘却の彼方に押しやり、幼子の如くなって、人に頼らず一人で「今」を生き抜こうと決意を固め、薄暗がりの小道を歩いて行く。

12) J. T. Nettleship; *ibid.*, p. 106.

13) *ibid.*, p. 107.

しかるに突然、予想もしなかった小川の流りに彼はでくわす。一体これは何を Roland に教えようとしているのか Nettleship は思案する。そして

That 'sudden little river' symbolises, perhaps, the stream of a great calamity, which has pitilessly gone its course, unheeding the cries and entreaties of the poor human beings who were ruined by it, ... (p. 107) (st. XX 参照)

と推測する。Roland はこの川の流れにおそれをなして、身の毛の逆立つような幻影に脅かされた。Nettleship に言わせれば Roland はここで又 'faith' を失くしている。彼は陰険に見える川の様子にこだわらず、それを無視し、堂々たる信念を持って川を渡って行くべきだった。Nettleship は "This river is again a symbol showing that a man must not stop to speculate in the abstract on misfortunes or sins of which he knows not the cause:" と述べ、つづいて "... any least sin of his own may, beginning as a thread of water, swell to a stream as terrible and deathdoing as this." (p. 108) とその川の持つ道徳的な意味に注意を促している。

これまでに Roland に与えられた sign は抽象的な事柄や出来ごとばかりであったが、これからは彼と直接関係のある quest の旅に関わりのあるものとなって行く。不思議な意味ありげな川を渡り切った後、彼は彼の同僚たちが過去に辿ったと同じ道を歩きはじめた。疑いもなくそこには彼等のなしとげた業や失敗の跡が歴然と残されていた。Roland はもまや彼らと同じ失敗をくり返すわけには行かなかった。彼は彼が目撃した夥しい足跡や戦いの痕跡をみて途方に暮れてしまった。(st. XXII と XXIII を参照) 同僚たちはいかにしてこの地に来たのか、戦いの相手は何者であったのか、同僚たちの quest の達成は間近である筈だったのに、何が目的の戦いだったのだろうか。ともあれ Roland は挑戦された時の用意のため、帯を締め直す必要を感じて身構えた。Nettleship はここで用いられている痕跡について次のように言う。 "... the traces of that struggle, with no footprints to or from them, are a symble, too, of the

effects on a man's self of his past sins, which effects, in his life's journey, ... (p. 108). それ故、人は絶えず、どこから来るのかわからない、えたいの知れない恐怖心におそわれる。彼はどんな戦いを誰れとして、勝利を得たのか、又敗北を喫したのか、全く記憶していない。たゞ目前に見るのは踏み荒された乾いた荒野だけである、Roland の場合のように。Nettleship は更に "These traces also symbolise the marks on another man's face of mental struggle he has gone through, ..." (p. 109). とつけ加えている。人はそれをみてその人が失敗した轍の跡を再びくり返すまいと、方法を考えるものであるという。

それにもかゝらず Childe Roland は彼の同僚がどんな苦痛を味わったか、十分に知らされていないかららしい。だから XXIV 節にみられる残酷な拷問用の責道具をみて彼は恐怖におのゝくばかりであった。Nettleship はこの道具は "...symbolises, perhaps, some great distress which happens to every man in turn, and which had happened to each and all of his companions — the distress of love, or ruin, or death of friends." (p. 109). と述べているが、筆者には少しこじつけがましく、とっぴな考え方であると思われてならない。しかし彼はこの様な道具はいつ、いかなる時に人を襲うかわからないので、怠りなく、心の備えをしておくべきだと Roland に Browning は暗示を与えていると思っているのかも知れない。それでも一方では Nettleship は XXII 節から XXIV 節までに、別な第二の意味があるとも述べている。即ち "Perhaps they are meant to show in all its bald ugliness, at once the cause and effect of some monstrous scheme of tyranny, or even of some end proposed as good" と。以上にのべた Roland の生涯に直接関係のある事柄を総括してみれば、結局すべての image も event も "meant to warn the man to look into himself, and make use of his own purity of intent," (p. 110) と Nettleship は考えていたことがわかる。従ってこの長篇の詩の中に現われるいかなる出来事も、いたずらに Roland の心を圧迫し、小心になら

しめようとするものでなく、以下に彼が述べるように重大な忠告と警告の意を表すものであると言う。

… they were meant not to weigh his spirit down as they did, but to show him the full and awful significance of failure in its widest sense of mistaking the truth of an end; in any event they were meant as warnings of the possibility of there being somewhere a brake which was not rusted and useless, ground untrampled yet, to be the scene of a second struggle, distress, or sin, which may happen yet, be as pure and prepared as we may. (p. 110)

それでXXIIIとXXIV節に見られるが如き恐怖に満ちた image や event を Roland の行く手に Browning は並べ立て、心の武装解除を決してしないで、絶えず身構えて用心せよ。何時いかなる時に災が振りかゝって来るかも知れないから、と諫めているのだ、と解釈する。

XXV節に入ると疲労困憊してしまった Roland が、全くなすすべもなく、茫然と荒れ果てた、むき出しの地に立つ姿がみえる。そこには汚い沼や瓦礫や粘土等が山と積まれてあるばかりで、昔の豊かな実りの姿の跡形もない。これは士気沮喪の故に土地を耕すことも出来なくなった国や個人のなれの果ての姿を象徴しているのだと Nettleship は確信する。

次に Roland の前に現われたのは忌まわしい、ぞっとするような色と形をした、腫物のような苔類が、大自然の拙劣なまがいのものとなって、荒れ果てた大地を覆っている姿である。Nettleship はこれは失望落胆の末、落ちぶれた人間や国が、けばけばしさや飲酒に溺れて、人生における寸時の慰めを得ようとしている姿の symbol であると言う。

行けども、行けども、旅は果てしなく、夕闇は四方より忍び寄るばかり、助けはどこからも来ず心細くなってしまった。Nettleship によれば “Roland having lost faith, is not able to see the significance of these things, …” (p. 111) というのである。それ故に彼は過去の悲惨なこれらの ‘sign’ や

‘symbol’に出会っても、用心しなければ彼自身に何時このような災が振りかゝってくるか知れないことを悟らないでいる。すると急に大きな黒い鳥が、何かの前触れのように音もなく飛んで来て、さっと彼の帽子を払いのけて行った。この黒鳥は単なる神話的存在でなく、人の内なる心に、痛ましい災難が近づいていることを予知し、指示を与える役目を帯びているものの symbol であると Nettleship は考える。それでもなお Roland はこの予知に対して無頓着で無視を続けていたので、かちっという音を聞くと同時に、洞穴の中に閉じこめられてしまった (XXIX節)。

Nettleship はこゝに至って重大な問題を突き付けられた。読者もこれから Roland がいかなる戦をして、ここから抜け出るかを怖れをもって見守ることになる。Roland は Browning によって “the bruised plants, the blind horse, the false friends of the past, the wrathful river, the battle-ground, the torture-engine” 等を見せられ、その恐ろしさを経験させられたが、これは彼のために何の役に立つというのだろうか。それらは皆彼の記憶の彼方に薄れ去って、無に帰すのであろうか。“What is the past if he cannot use it? What are his own sins if he cannot learn by them to avoid evil?” (p. 111) と、さすがの Nettleship もこゝで当惑せざるを得なくなった。Roland は自己や他の人々のためになる清き、ある purpose (この目的の象徴が “The tower” だと Nettleship が考えていたことは明らかである) の quest の旅に出た筈であった。しかしそれを果すことが出来ないうちに何故捕われの身となり、恐ろしいわなに掛ってしまったのだろうか。彼は突然 “The light of truth (the sunset)” に照らされて、自分が間違った生き方をずっとしていたことに気がつき、幻滅の悲哀の虜になってしまう。

しかし神は彼をすてたまわず、彼の中に本来的に植え付けられている勇気を呼び起こし、彼を取り囲む evil に立ち向わせ、絶対絶命の窮地から立ち上がらせてくれる。今こそ、“Then indeed is the time to try the man’s whole strength.” という性根場に立たされた。その結末を Nettleship は以下の如く自

信をもって力強く述べる。

Forgotten pledges and devilish traps are as nothing; so long as life remains, the glory of conquering the consequences of defeat is greater than the glory of a bloodless victory. A man may go on failing until all the world's judgment says he is lost; God has not lost him until the moment of death; ... if he brings his courage to the breach, ... God will come to him, the battle will be his own, ... the horrors, will sink into nothingness; the great purpose will be won; and as in his golden childhood, God will be all in all. (p. 112)

Roland は己の敗北を認めた上で、それにこだわらず、命のある限り前進を試みた。その時神は、彼の許に來たり、救いの手を延ばし給うた。その時にこそ、かつての quest に旅立った時の目的の大願は成就し（塔に到達し）幼き日の如く神と共にあった、と Nettleship は結論づけている。Browning がはたしてこのような allegorical な意味をもってこの詩を書いたかどうかは全くの疑問である。詩人自身が前述のように、常に人々の問いに対し、アレゴリーでないと否定して來ているから。しかし Nettleship の論文は当時かなり注目をあびたことは事実であるらしい。彼が論文の初に述べたように、研究者として又一読者として、この詩から読み取らざるを得なかった意味を公表したのであるならば、それはそれなりに無視出来ない意義があるものと思う。芸術作品は往往にしてその作者の制作の意図を乗り越え、それとは必ずしも一致しない鑑賞の仕方をされがちである。それでもそれなりに、それには大切な意味と価値があるものと思う。Nettleship のこの論文の場合のように。

次にこの作品に含まれているアレゴリー的要素の存在と、その価値を強く主張した Edward Berdoe の主張をみてみよう。彼は 1891 年に *The Browning Cyclopaedia* を著わして、多くの人々の Browning 研究の道しるべとなった。

しかしその後の長い年月の間に、彼の研究成果の中に、正確さを欠いたり、解釈の仕方にいくつかの問題点が発見されたりした。それでも今なお、多くの示唆に富んだ書物だ思われていることは疑いないと思う。今回のこの Childe Roland に関する彼の unique な考え方を調べているうちに、百年後の現在に共通するような問題の警鐘が鳴らされているのを見て驚かされた。彼は彼の主張を次のように披露する。“For my own part, I see in the allegory … a picture of the Age of Materialistic Science, a ‘science falsely so called,’ which aims at the destruction of all our noblest ideals of religion and faith in the unseen.”⁽⁴⁾ とし、旅行者である Roland は真理の探究者であるが、跛の白髪の老人に騙され、不正の道に入って行ったとする。しかもその老人は、cynical な destructive な critic であって、英国の大学や医学校や家庭の中に居座って、若者たちを “desolate path of Atheistic Science,” に駆り立て、行くのである。その無神論的な科学は “strews the ghastly landscape with wreck and ruthless ruin, with the blanching bones of animals tortured to death by its ‘engines and wheels, with rusty teeth of steel’ ”

(p. 105) そして更に又、知識にのみ傾くその science は病をいやし、治療を施することを忘れさせ、医学生たちを不正利得や収賄を追い求める者にしてしまった。(このような実例は当時のパリやベルリンの医学界にスキャンダルとして度々みられた。)そして彼らは窓も戸もない ‘dark tower of knowledge’ に、到達するために行なった動物実験の犠牲になった “Toads in a poisoned tank, / Or wild cats in a red-hot iron cage,” (st. XXII) をみて楽しんだ。次に、詩の中で重要な post を占めるのは、The lost adventurers であるが、彼らは “are the men who, having followed this false path, have failed, and who look eagerly for the next fool who comes to join the band of the lost ones.” を意味すると言う。又詩の終りにあたって

(4) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia*, (The Macmillan Company, New York, 1931) pp. 104~105.

Childe Roland が勇気を鼓して、喇叭を口に当て、高らかに、“*Childe Roland to the Dark Tower came.*”と吹き鳴らした目的について次のように解釈を加える。“… he did so as a warning to others that he had failed in his quest, and that the way of the Dark Tower was the way of destruction and death.”そして彼は彼のこの comment に対して多くの commentators が同意見であることを付け加えることを忘れていない。それから Roland の研究に関するこの論を閉じるにあたり Berdoe が “I have good authority for saying that, had Mr. Browning seen this interpretation of his poem, he would have cordially accepted it as at least one legitimate explanation.” (p. 105) と自負の念をちらりとのみぞかせているのはいかにも彼らしい。

Berdoe と異なる立場に立つ Norton B. Crowell は “Berdoe’s suggestion is a notable exercise in sustained nonsense, an admirable equipoise of imperception and private bias.”¹⁵ と酷評する。Browning が生体実験や生体解剖に大反対であったことは事実であり、動物保護会の副会長にもなっていた。しかしだからと言って直ちにこの詩の中に ‘anti-vivisectionist statement’ があると断ずるのは不可能であると述べている。そして David V. Erdman も “*Browning’s Industrial Nightmare*” (Philological Quarterly XXXVI, 1957) という論文の中で Browning は Childe Roland の中に industrialism のもつ evils に対する嫌悪の情をつよく表わしているが、生体実験については全く触れていないことを明らかにしている。

筆者が前述した如く W. C. DeVane は Browning’s intention of the poem は allegorical なものでなく “came upon him as a dream” と主張しているが Crowell はその説は容認出来ないと言う。詩のテーマや簡単な内容は夢うつゝの時に思いつくことはあるにせよ、その詩を書く作業に従事している間は正気

(15) Norton B. Crowell; *A Reader’s Guide to Robert Browning* (University of New Mexico Press U. S. A., 1972) p. 142.

であらねばなるまい。丁度 Coleridge が *Kubla Khan* を opium の影響下にある時におもいつき、さめかけた時に書いたように。それ故 Crowell は夢のように思い浮べたテーマであるからと言ってそれが allegory ではないと言えないと考えるのである。彼は “‘Childe Roland’ is one man’s journey into his heart of darkness, where at every turn he meets the unknown terrors of his soul.”¹¹⁷ と内容を要約する。そしてこのことについては Blackburn の *Robert Browning: A Study of His Poetry* を参照するように勧める。

彼は前号に記したように、詩の主人公は、Browning 自身であって、避けることの出来ない旅路にでかけねばならなかったのだという。Blackburn は “The poem describes a man’s journey into the interior darkness of himself in order to confront the nexus of destructive energy which Jungians call the Shadow.”¹¹⁸ と書いているが、すぐその後で “Browning’s poem, however ends at the moment before encounter, the moment Roland blows the slug horn to summon the demon from the tower.”¹¹⁹ と指摘している。それで、読者は Browning の意図がばやけて、わからなくなることがある。このため、Crowell が “… the poem has been seen as an expression of Browning’s own failure”¹²⁰ と述べているのが了解出来るように思われる。

Blackburn は Browning の詩と Joseph Conrad の *Heart of Darkness* (「闇の奥」との間にある面白い parallel を発見している。それについて Crowell が解説しているので述べておきたい。彼は先ず Roland の詩は Conrad の作品と同じように2つの level から読まねばならないという。表面のレベルからみれば、この詩は “is an allegory of each man’s journey through life to death.” ということになり、Browning を大なる楽道家と思っていた critics にとって most crushing reply となるであろうと言う。又

¹¹⁷ Norton B. Crowell; *ibid.*, p. 143

¹¹⁸と¹¹⁹ Thomas Blackburn; *Robert Browning: A Study of His Poetry* (Eyre & Spottiswoode London, 1900) p. 193.

もう一つの、そして最も重要な level は “as Blackburn points out, it is a study of the individual's most lonely and terrifying journey—into himself—the dread journey that each man must make before he comes to the Dark Tower. It is the two levels, working in counterpoint, which make this Browning's most original and powerful poem …” とし、更に “It is a forerunner of such powerful studies as Conrad's *Heart of Darkness*, Franz Kafka's *The Trial* and “The Metamorphosis,” and T. S. Eliot's *The Waste Land*.”¹⁹ と讃辞を提している。

Crowell の説に従えば “Childe Roland” は “is a fearsome pilgrimage into the dark night of the soul, with horror piled on horror. Everywhere through the poem is the desperate fear of a nightmare half-recognition of unknown danger and evil, savage, irrational, implacable.” つまりそれは、あたかもすべての都合のよい弁明や、合理化されたような言い訳が全く通用しなくなった自分という者に、自分が正面から向き合っている状態である。(It is man face to face with himself) “It is thus a study in terror and at the same time a surrealist account of life.” このような恐ろしい経験をしている時には、何一つとして人は恐ろしく思うものはないということに注目してほしいのである。というのは “Every fear is wholly within the soul of Roland. He never meets any direct menace or danger, but he suffers the extreme torments of terror, which come not from without but from within, for the journey into his psyche is presented in terms of his journey to the Dark Tower.”²⁰ だからである。Roland が旅の途中で身の毛の逆立つような恐ろしい風景や、いまわしい汚れたものに出会ったとしても、それらはそこに初めからあったものだけで彼に何らの危害をも加えてはいないのである。Roland が自分の心の中でそれらを恐れたに

(19) Norton B. Crowell; *ibid.*, p. 144.

(20) *ibid.*, p. 144.

すぎなかったのであるという。

Crowell が指摘しているように *The Ring and the Book* の中で Browning は Pope に “All to the very end is trial in life” (Book X l. 1299) と言わせているが、誠に人生に於いて人は皆死ぬまで苦しい災難や試練に会うものである。この事実を最もよく、恐ろしく描写してあるのは、数多くある Browning の詩の中でも Childe Roland に及ぶものはないと Crowell は自信をもって述べている。

ついでながら Crowell が人生の不幸についてそれを二つに分けて、論じている所を、少し引用し、述べておきたい。彼は人生には二種類の不幸があるという。第一は日常茶飯事の生活の苦労や不慮の災難等であるが、第二のは Roland が経験してきたような自分自身の心の中に潜伏している恐ろしい暗い evil の力との戦いであるとする。Crowell はかつて Betty Miller の書いた *Robert Browning, A Portrait* の中で彼女が Browning は “Psychologically undeveloped and twisted, a stunted mama’s boy, Oedipally attached to his domineering mother.” と言っているのを読み、それに反論したという。そのことにつき彼は次のように論じている。

I resist her attempt to identify Childe Roland with Browning, especially her particular theme that the poem reveals Browning’s neurotic fear of failure as a poet, for no man could have written with such insight into the dark forces of the soul without having probed his own soul with uncommon courage and maturity. To write this poem, one must have made the journey, but this is not to say that this journey is through Browning’s soul. Rather, it is the journey of Everyman, and Browning was content to let the world in good time discover his meaning.²¹⁾

21) *ibid.*, pp. 144-5.

実に面白い論評だと思う。

この詩が一般的に allegory と考えられ、いくつかの ingenious な interpretations が発表され、“Dark Tower” は Love, Life, Death, Truth 等を象徴するとも言われて来た。そのことを承知の上で、Arthur Symons は、次のように断定する。“But as a matter of fact, Browning, in writing it, had no allegorical intention whatever. It was meant to be, and is, a pure romance.”²²

Browning は、この作品の中で彼の天才的な imaginative power をもって、自由自在に、豊かな表現力と、言葉を駆使して、見事な情景描写をしてみせた。Wm. Lyon Phelps はこの詩には Coleridge の中にみられる ‘wizard twilight’ がほのめき “The atmosphere is uncanny and ghoulish: the scenery is a series of sombre and horrible imaginings” だという。それ故これでは到底 allegory は書けないと説く。“No consistent allegory can be made out of it, for which fact we should rejoice. It is a poem, not a sermon; it is intended to stimulate the imagination, rather than awaken the conscience. And as we accompany the knight on his lonely and fearful journey, we feel thrills caused only by works of genius.”²³ Shakespeare の Old Ballad から引用した僅か一行から、素晴らしい “succession of vivid pictures” を作成し得た Browning の才能のおかげで、Roland が進み行く道に、迫り来る闇の力を多くの読者はひしひしと感ずることが可能になった。詩の終りに至るまで Roland が身の毛が逆立つ恐怖と戦いつつ、塔の目前にたどりつき、夕闇に向かって、昂然と高らかに、喇叭を吹き鳴したという所を読んだ時、Phelps はその solemnly splendid な様子に打たれ、“shout of physical exultation” を抑制することが出来ないまでに感動したとするしている。そ

22) Arthur Symons; *An Introduction to the study of Browning* (E. P. Dutton & Co., New York, 1923) pp. 118-119.

23) William Lyon Phelps; *Robert Browning How To Know Him* (The Bobbs-Merrill Co., Indianapolis, 1915) pp. 231-232.

の時の感動の深さを綴った Phelps の言葉が筆者に強い印象を残したので、こゝに引用しておくことにする。

…the close is so solemnly splended that it is difficult to repress a shout of physical exultation. One lonely man, in the presence of all the Powers of the Air, sends out an honest blast of defiance—the individual will against the malignant forces of the whole universe.²⁴

彼は又 “He that endureth to the end shall be saved.” と痛感したのである。そして “Thus we may take this wholly romantic poem as one more noble illustration of Browning’s favorite doctrine—Success in Failure.”²⁵ と述べ論を終えている。

Childe Roland が allegory でないという立場を堅持する学者たちの中から Brooke と DeVane にスポットをあて、彼等の主張に耳を傾けてみよう。多くの人々は詩の中に何か allegory of human life のような物を見出そうとするが、Brooke は作者自身がそれを否定しているのだから、それ程たしかなことはないではないかと言う。しかし一方では彼はすべての story は “has at its root the main elements of human nature” だから “it is always possible to make an allegory out of any one of them.”²⁶ と言い、もし我々が物語を利用して、寓話を作りたければ、それは可能であるとも言う。たゞし Childe Roland は “… is nothing more than a gallop over the moorlands of imagination;… But one thing is plain in it: it is an outcome of that passion for the mystical world, for adventure, for the unknown, which lies at the root of the romantic tree.”²⁷ であると興味深い comment をしている。更に彼は我々が往々にして感じている Browning

²⁴ *ibid.*, p. 237.

²⁵ Stopford A. Brooke; *The Poetry of Robert Browning* (Thomas Y. Crowell Company, New York, 1902) p. 276.

の難点がこの詩の中にもあるという。つまり，“Browning’s poem is too much in the vague. The romantic tales are clear in outline; this is not.”²⁶と手厳しく批評している。

最後に DeVane の説に移ってみよう。彼は特に目新しいことは言っていないが、次の言葉を引用しておくことにして止めておきたい。“*Childe Roland* is one of the most imaginative and noble of Browning’s poems, and has taken its place among the great expressions of courage in English literature.”²⁷

おわりに

Childe Roland の詩が寓話詩であるか、否かについて、長い間論争されているが、なかなか埒が明かないらしく、はっきりした結論は出されていないようである。筆者も昨年の第9号の紀要と本年第10号に書いて見たが、厳密な意味で、自分自身にまだ、いずれとも、決着がつけられないでいる始末である。机上にある資料を相手にこれから更に研究を続けて行く積りである。

²⁶ *ibid.*, p. 275.

²⁷ William Clyde DeVane; *ibid.*, p. 207.